

2035 年 ± 5 年

東京都小平市 小俣 一郎

「2035年 ± 5 年」とは南海トラフ巨大地震の発生時期の予測で、これは著名な地球科学者で京都大学名誉教授の鎌田浩毅氏が強く警鐘している予測であり、耳にされたことのある方も多いかと思う。この「2035年 ± 5 年」の根拠について Copilot 【Microsoft が提供する AI アシスタント】に聞いてみたところ下記の答えが返ってきた。

◎鎌田浩毅氏（京都大学名誉教授）が南海トラフ地震の発生時期を「2035 年 ± 5 年」と予測している根拠は、主に以下のような地質学的・歴史的な周期性に基づいています。

○予測の根拠となる主な要素

1. プレーートの沈み込みと跳ね返りの周期

- ・南海トラフ地震は、フィリピン海プレートが日本列島の下に沈み込むことで、ひずみが蓄積され、限界に達すると跳ね返るようにして巨大地震が発生します。
- ・この「沈み込み→跳ね返り」のサイクルが約 90～150 年周期で繰り返されており、過去の地震履歴から次の発生時期を推定できます。

2. 歴史的な地震の連動性

- ・例えば、1707年の宝永地震では、東海・東南海・南海の三連動型地震が発生し、その49日後に富士山が噴火しました。
- ・鎌田氏は、このような連動型の巨大地震が再び起こる可能性が高いとし、2030～2040 年の間に発生する確率が非常に高いと述べています。

3. 政府の地震調査委員会の確率評価

- ・内閣府は「今後30年以内に南海トラフ地震が起こる確率は70～80%」としていますが、鎌田氏はそれをさらに絞り込み、2035 ± 5 年という具体的な時期を提示しています。

4. 東日本大震災の影響

- ・2011年の東日本大震災によって、日本列島のプレートが一瞬で5.3メートル東に引き伸ばされたことが、南海トラフ地震の発生リスクを高めていると指摘。
- ・この地震の余震活動が今後20年ほど続くと予測されており、それが南海トラフの活動にも影響を与える可能性があります。

鎌田氏の予測は、単なる直感ではなく、地震学・火山学・歴史的データの複合的な分析に基づいています。彼はまた、南海トラフ地震が起きた場合、富士山の噴火や首都直下地震との連動リスクにも警鐘を鳴らしています。

Copilot はこの答えと共に、この答えを導き出した参考資料として下記のHPを上げた。

<https://principle-bcp.com/2021/11/27/nankaitraff2035/>

<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2022/67524>

https://www.news-postseven.com/archives/20210808_1681652.html?DETAIL

<https://president.jp/articles/-/85306>

鎌田氏の予測は、地震による地盤の隆起と沈降の周期性に基づいたもので、2030 年代の発生を「必ず来る」「2 億年ぐらい繰り返されているので、パスはない」と強調している。ただそれは恐怖を煽るものではなく、防災意識の啓発を目的としたものであり、鎌田氏は「自分の身は自分で守る」という姿勢の重要性を繰り返し訴えている。

一方、発生予測を言えるのは南海トラフ地震のみで、他の地震については発生時期を明確に特定することはできないとも発言している。例えば首都直下地震についても、「いつ起きてもおかしくない。それは明日かもしれないし、50 年後かもしれない」「首都圏の中に地震の巣が19か所あり、そのどれが動いても不思議ではない」としている。

鎌田氏はいまでも警鐘を続けている。この文章を書いている間にも下記の新たなHPを発見した。

<https://president.jp/articles/-/101202>